

見つめなおそう日本の森

—「日本の森と自然を守る全国集会 | N北海道」報告—

たかはた・しげる
1935年生まれ
東京農工大学農学部卒業後、
農林水産省研究機関に勤務。
専門は草原生態学、北海道自
然保護協会常務理事、第14回
森と自然を守る全国集会実行
委員。

高 畑 滋

本文のねらい・要旨

二〇〇一年十月十三―十五日に開催された「日本の森と自然を守る全国集会 | N北海道」の報告をする。この集会の実行委員に寺島一男実行委員長をはじめ五名の協会員が参加して中心的な役割を果たした。すでに資料集と報告集が出ており、集会の内容については参照されたい。ここでは集会の評価と自然保護運動にとっての意義を考察する。

主催するに至った経緯

日本の森と自然を守る全国連絡会（八木健三会長）が毎年全国各地で集会を開いている。第一回は一九八八年長野県で開催、第二回は北海道斜里町、前回第十三回（二〇〇〇年）は新潟県村上市で開催した。この間全国各地をまわり、その時の自然保護問題を的確に捉えて論議してきた組織力は偉大なものがある。それぞれ実行委員会が作られているが、開催地の自然保護団体、山岳団体、研究者集団などが集まって実行に当たっている。北海道集会は二〇〇〇年一月になって急速開催が決まったこともあり、急造の実行委員会であったが、今野平支那事務局長の統率良く、難しい事業を成功させた。実行委員会の構成は、北海道自然保護協会のほか、勤労者山岳連盟、大雪と石狩の自然を守る会、ユウパリコザクラの会、十勝自然保護協会、科学者会議北海道支部であるが、後援を申し出た団体・個人は一〇九にのぼった。協賛後援も自然保護助成基金をはじめ四団体から得られた。寄付金も多く寄せられ、四五件の申し出を受けた。

参加者が全国にわたるため、航空券、宿泊手配、現地視察など旅行社の支援を頼んだ。事務代行料に替えられない煩雑な仕事を分担してもらい集会成功に結びついたと思っている。

北海道自然保護協会は全国交流会を担当した。出席者一五一名の盛会で、宴なかげで八木健三・高橋延清両先生への感謝状贈呈が行われ、ギャグの利いた文面に参加者から爆笑の喝采を浴びた。

好評であった講演会

「宇宙人に変身したどろ亀さん」と題した高橋延清東京大学名誉教授は高聲を上げてリュックサック姿で壇上から元気に聴衆に呼びかけた。どろ亀さん主役のビデオ「森のちから」森にかかれ、森にかえる」は東京大学北海道演習林の林分施業法をわかりやすく解説し、森には無駄が無い、調和の世界、美も愛も無いもあるがウソがない、と言うメッセージが伝えられた。林分施業法とは林分毎に最適な施業をすることによって、森のちからを伸ばすことだと言うことを、現場の状況を示しながら具体的にどんな働きかけをするか解説しているので大変勉強になったと好評であった。三日目現地視察で富良野を訪問する人には丁度良い紹介になった。

北海道から「千歳川放水路計画：市民が止めた公共事業」小野有五北大教授は、巨大放水路のもととなった石狩川基本高水水量一萬八千㎥/sが過大で、二〇〇〇年に一度の確率で起きる大雨時よりも大きい流量を設定し、住民合意の得られない巨大計画になったことを指摘した。河川のあるべき姿を住民と専門家、河川管理者が柔軟に検討する方策が必要であろう。

「不思議な自然が力をくれたー大雪山国立公園
士幌高原道路の反対運動ー」及川裕十勝自然保護
協会前会長は、二八年間にわたる反対運動の原動
力が、士幌高原の美しくも不思議な自然に有った
ことを力説した。研究者の地道な調査に支えられ、
大勢の人が反対運動に立ちあがった様子をスライ
ドで振りかえった。自然にやさしい長大トンネル
と言うが、ナキウサギの住む風穴を壊すトンネル
は不思議な自然を失うことになり、地域活性化の
ためにならないこと、北海道自然環境保全指針で
無車道地域とした場所の道路廃止を訴え知事決断
を引き出したことを報告した。

「日高横断道路工事を中止し 日高山脈の聖域
を守ろう」 倭浩三道自然保護協会会長は、日高山
脈は一九八一年国定公園に指定され、氷河地形と
高山植物の原始山岳景観に特徴を持つ世界に誇る
べき自然遺産だとした上で、中心部を通る横断道
路は、三本目の自動車道路で、開発道路と言う要
件を満たしていない危険な道路であることを立証
した。着工から十七年経った今でも、工事進捗率
は四〇％で途中の補修工事が追いつかない状況に
ある。目的も必要性も無い道路は中止させようと
訴え、会場の共感を呼んだ。

「知床から日高まで」立松和平氏は忙しいなか
山陰地方から駆けつけたという同氏は、知床の海
の魅力から話し始め、漁協婦人が山に木を植え
豊かな海を取り戻している話、山河を守り、森を
育てることは、一次産業が生き生きと食糧・健康
を守ることにつながる。山男としては道が無い日
高山脈が好きだ。百名山に殺到する登山はおかし
い。足尾の山で一度壊した自然を取り戻すのに大
変な苦勞をしている。広い禿山に点のような植林

だが、自然の大事さを実感できる活動だと思
う。北海道の素晴らしい自然を未来に残しまし
ようとうと強調された。

多彩な分科会発表

分科会発表は集案内と同時に募集を始めた。
分科会テーマの設定は、集会の基本的な姿勢にも
かかわるものであるが、応募される人は分科会テ
マを見て発表を決意されるので、分科会易く発表
意欲を増す表現でなければならぬ。このためや
や抽象的な分科会名になったが、説明的に「例え
ばこのような問題」としてキーワードを挙げてお
いた。自然の問題はテーマでもフィールドでもみ
な繋がっている。どういう切口にして、各分科会
バランス良く分散できるか難しいことではあった
が、どの分科会も魅力が有りハンゴしたいようだ
との感想が聞かれた。

第一分科会 森を守るーこれ以上森を壊さないた
めにー

：道路やダムは森を壊す、日高横断道路は要らな
い、国有林、民有林の現状と将来、ブナ伐採を止
める：

「森を守る」テーマは広く捉えられて、山岳自
動車道路問題から、ダム、流域環境問題里山、土
地利用問題など発表は多岐に渡り、これらをまと
めると言う状況ではなかった。コーディネート
は森林が伐採されると川はまったく別の川になり
砂防ダムも必要になる。森林・伐採・砂防ダムを
一連の系として捉え、どのような生態系が望まし
いのか具体例を基に話題提供し、森と流域環境を
柱に文化の問題として議論を誘導したが、時間も

不足で発言を聞くだけで終わった感があった。
当初予定された七題の発表の他に、「砂防ダム
と清流環境」「里山の破壊と都市問題の係わり」
の二題が発表された。

第二分科会 森を創るー山から海まで森をつなげ
ようー

：植樹・植林活動、森林再生の目指すもの、森は
野生動物のゆりかご、山のトイレ・盗掘・オーバ
ユース：

北海道における森は、国有林、道有林、大学林
で七〇％を超えており、従来専門官が独占的に対
処してきた。近年国有林では八〇％が保安林とい
う状況になって、住民参加の森林管理が必要になっ
てきている。このような状況のもとで、国の果た
す役割は何かを見極めなければならない。分科会
では、①森林ー川ー海を流域全体トータルに考え
る ②森林の市民管理の方向 ③国有林管理の主
体を明らかにする、ことを目指した。

「漁業者の植林活動について」

吉田東海雄（北海道指導漁連・環境部長）
明治三〇年（一八九七年）制定の河川法が、一
〇〇年目の一九九七年に大改正され、環境概念が
取り入れられた。地域住民の意見を聞き、環境型
河川改修をするようになった。北海道指導漁連で
は公害対策基本法以後、公害対策本部を設置し年
間八〇〇〇万円の漁業者の資金を使って環境保全
に取り組んでいる。サケ・マス帰帰率三％やコン
ブ、ホタテ、カキの前浜漁業の盛況は、漁業者が
川ー海の世界を大切にしたら結果だと思っている。
北海道は「お魚増やす植樹運動」の先駆けであ
り、十四年目を迎える。全漁協一一〇組合の内、

七三組合が植樹運動を行っており、これまで五六万本（四〇樹種、広葉樹八〇％）を植えている。

漁業者が山に樹を植えるのは、豊かな前浜はきれいな河川環境によってもたらされるからで、北海道内一〇〇〇点の水質検査を行い、樹を植える漁業者にフィードバックして確認している。この事により安全・新鮮・美味な海産物を一六〇万トン供給している。サケ・マス増殖河川の環境保全本も漁業者の大事な仕事だと思っている。

「十勝三股森林再生プロジェクト」

鏡 垣（十勝自然保護協会）

層雲峡から糠平湖へ抜ける国道二七三号三國峠から見る十勝三股盆地は素晴らしい樹海だが、真上からの空中写真では、伐採林道や伐採木堆積土場が沢山あって無残な状況だ。かつては二〇〇〇人の林業関係者が居た十勝三股は、現在は二戸しか残っていない。伐採の手は国立公園の奥地・高標高地にまで伸びている。この地域で市民による森林再生プロジェクトを立ち上げたのは、生産目的でない森林は如何にあるべきか自然保護団体主導で確かめる事と、過剰な伐採を食い止める意義があると思った。現在無償貸与を受けた土場跡で、ヤナギ類を子守り林として、周囲にエゾマツ、トドマツ、ダケカンバ若木を移植する森林再生プロジェクトを開始した。技術的にも労力的にも問題は大きい。ホームページを参考にしてください。

「インドネシア熱帯林再生プロジェクト」

小林紀之（住友林業）

環境問題に関しては、一九九二年リオ地球サミット以来パラダイムが変わった。環境保全に果たす企業の役割を強く認識する事になった。住友林業は、富士山麓台風害跡地復旧のボランティア活動

を行った。さらに日本の環境技術を国際協力に生かそうと、インドネシア東カリマンタン・スプル地区（マハカム川河口から一二〇km）にプロジェクトサイトを持っている。この地域は人口一五〇〇一六〇〇〇人（はっきり分らない）、川沿いに丸太筏が並び、トイレと炊事・洗濯・水浴びが同居し、パラボランテナが林立する不思議な世界だ。劣化した二次林三〇〇〇ヘクタールを実験地としている。ジャワ島からの開拓移住者が焼畑をやっている。林業合弁企業とインドネシア林業省、東京大学造林教室の共同研究だ。

森林再生には、この地域で優占する在来種フタバガキ科の植林を試した。焼畑跡地にフタバガキ科樹種は無理だと言われたが、菌根菌を接種したりして成功した。ショレア・レプルスは八年経って直径二〇cmまで育っている。他にスンカイ、ペロネマなど九〇種もの植林に成功している。

発展途上国での植林は、トータルフォレスト・社会林業として考えなければならない。周辺開拓民とは、焼畑を止めて混農林業で共存できないか実験している。樹の下にピーナッツ、陸稲、トウモロコシ、トウガラシ、コシヨウなどを植栽したり、林業樹種でないマンゴー、ドリアン、コーヒーなどの混植を進めている。

フタバガキ科苗木生産は年間数十万本に及ぶが、豊凶年があって種子の入手が困難な事、共生する菌根菌優良株の見極め、組織培養増殖など課題は多い。フタバガキ科でも萌芽タイプがあり、挿し木植林に使えるか検討中だ。熱帯林の膨大な樹種の個生態や、山火事を含む地域生態など分からない事が多いのも問題だ。

「バイオブロック工法で樹を育てる」

酒井ちひろ（札幌市中央区）
カミネツコンのほうがよく知られている。東三郎北大名誉教授が考案した、再生ダンボールを六角に組み合わせ土に挿したヤナギの枝を置いていくだけの植林法だ。誰でも作れて、誰でも植林できるので運動として適している。

毎週水曜日札幌ばんけい森の学校（スキー場の隣、レストラン我夢主の横のブラック小屋）で講習会をやっている。子どもでも出来るので、親子連れでまずやってみましょう。

「オガクズを利用したバイオトイレ」

寺沢 実（北海道大学森林資源科学）

人間の尿は多孔質であるオガクズと共に好気発酵して分解する。臭いも無く、後の処理も楽である。問題は温度保持（五〇―六〇℃）と攪拌動力だ。山のトイレに応用できるように研究を進める必要がある。いろいろな議論が出たが、今すぐこれでいきましょうとはならない。根底に山のオーバーユースがある。それぞれの山で登山者管理も含めて、どういう山であってほしいから真剣に考える時期だと思う。

「高山植物盗掘防止ネットワーク委員会と活動の現況について」

長谷川雄助（事務局長）

盗掘で山の自然が壊されている。高山植物保護活動をしている五二団体が集まってネットワークを組んだ。活動は各団体の創意工夫で行い、ネットワーク委員会から直接活動の指示はしない。ネットワーク全体が考えている事は年に一回シンポジウムを開いて検討し合っている。北海道希少植物保護条例は一つの前進だが、どのような種を取り上げるか、どの地域を指定するかなど、ネットワー

ク委員会が果たす役割は大きい。

「北海道アウトドアガイド資格認定制度について」

後藤言行（北海道自然観察協議会）

オーバーユースと絡むので、第一分科会「森を創る」から回されてきた。アウトドアガイド資格は、増加するアウトドア活動の遭難防止、環境保全、質の高いガイドを目指し考えられているが、認定制度は観光業者主導で進められており、自然保護より観光産業振興が優先するものとなっている。自然破壊の元凶となるオーバーユースに対しても、「責任を認識し、問題解決のために行動すること」という方針しか示されていない。ガイドに求められる資質の中でも「環境への配慮」は、「自然環境保全の理念を理解する」と抽象的である。有償ガイドしか考えられておらず、ボランティアガイドの位置付けが無い。自然保護に役に立つガイド資格を訴えていきたい。

第三分科会 森と生きる―森を核に循環社会を造りあげる―

…流域から沿岸まで、農山村から都会まで、エコミュージアムが示す未来社会、先住民の智慧に学ぶ…

「人工のダムより緑のダムを」

稗田一俊（遊楽部川を守る会）

ユーラップ川、宿野辺川、サランベ川などで川の観察を続けている稗田さんは、流域土地利用の改善、河川のショートカット化など排水促進、異常気象による降雨量増大で、河床低下・川岸崩壊・泥水発生が増えていると指摘、災害補修工事がさらに事態を深刻にしている事を映像で示した。「サンルダム建設の問題点と天塩川の生態系保全」

サンルダム建設を考える会

公共事業を行う開発局と住民とが話し合って、

(1)天塩川流域の森林・川・海をつなぐ生態系の変化和開発のあり方 (2)流域のアイヌ民族の歴史と和人の探検家松浦武四郎から学ぶ (3)「サンルダム建設を考える集い」実行委員会が提案した治水代替案と総合的治水対策 (4)これからのインフラ整備や復元のための公共事業のあり方を検討している。

「先住民の智慧に学ぶ」

小川早苗（アイヌ文化伝興の会手づくり）

アイヌ民族は、自然は自然のままに山の木も草も、生活に活用しながら育ててきた長い歴史を持っている。アイヌ民族は今もこの地で自然と共生できる暮らしを望んでいる。これは環境時代に生きる広範な市民の願いと共通である。自然と共生する先住民の智慧に学んで未来を展望しよう。森を核に壮大な循環社会を展望するところまではいかななかったが、社会の仕組みの中で歪められている問題を明らかにし、未来につながる問題として感じられる人達をたくさん創り連帯しよう。そのための人創りソフトを皆で考えていきたい。

第四分科会 森を楽しむ―よみがえる里山・いのちの故郷―

…野外環境教育、エコツーリズムの光と影、サンデーフォレストの勧め、森林公園の役割、環境省整備事業に物申す…

森を大事にする事は、森を楽しむことから始まる。これまでの「日本の森と自然を守る全国集合」ではこのような問題提起はなかったのではないだろうか。市民が主導権を持った森林管理、環境教

育を考えていきたい。

「森を楽しむよみがえる里山・いのちの故郷」

小川 巖（エコネットワーク代表）

北海道の森林率は七〇％あるが、森林と人との付き合いは十分でない。森林公園一〇〇個所の実態を調べたが、広場・運動公園の利用が殆どで、遊歩道利用は一％以下であった。森を楽しむ機能は働いていないと言える。森の多様な特徴を生かす「楽しむプログラム」作りが必要だろう。

「札幌の小さな宝箱―西岡水源池」

山田三天（西岡の自然を語る会代表）

札幌南東部月寒丘陵にあって、池と湿原、森林が一体となった小さくても複雑な自然環境となっている。トンボは北海道で最高の四四種、野鳥は一四〇種以上が記録されている。

一九八九年環境庁「ふるさと生き物の里」指定を受けた札幌の宝だ。これまでポート場、河川改修、道路計画、パークゴルフ場などの開発に反対し守ってきた。生き物調査報告書を出し、毎月第三日曜日の定例観察会を続けて二〇〇回になった。「グリーンフォーラム旭川の野外活動（生態学的混播法による植樹）」

鎌田明徳（大雪と石狩の自然を守る会）

子どもたちが身近な自然を舞台に遊びを中心にやる気を起こさせる活動で、一九七五年から始まった。一九八三年から名称をグリーンフォーラム旭川に変え、一九九一年から父母中心のワークショップ体制になった。専任五名、会員四五名で年に例会十回、特別講座六回を実施している。生態学的混播法とバイオブロック工法で河川周辺荒地地に植樹を行っている。子どもたちに「樹」の思い出を持たせることで有意義な活動だと評価している。

「北海道のエコツーリズムを考える会の活動」

宮本英樹（北海道自然体験学校NEOS）

一九九八年に発足した会で、ツーリズムを通して教育・宿泊・輸送・緑化など幅広い問題を考えている。北海道らしいエコツーリズムの基本・実態・将来方向を求めて、シンポジウムやアクションプランを計画した。その中からガイドライン（二〇〇一年バージョン）を作成した。啓蒙書として「北海道ネイチャーツアーガイド」（山と溪谷社二〇〇〇年八月）を発刊した。まだネイチャーツアーであってエコツアーまでいってない段階と認識している。ツーリストだけが自然資源を使っているわけではないし、自然が損なわれればツーリズムが成り立たない。自然を守る立場で、利用者が規制管理する。いろいろな人達と交流し勉強していく活動を続けたい。

中心になっているNEOSの紹介をする。NPO法人で会員五〇〇名、ネイチャーセンターを運営し、年間二〇〇プログラムを実施している。地域によって違うガイドラインを、きめこまかく作るためにモニタリングが大事だ。利用者が学習管理していきながら、生態的・物理的・社会的許容量を検討していきたい。

「農林水産大臣様苦情申し立て上げます」無駄な公共事業が北海道の自然遺産を蝕む」

五十嵐敏文（フォーラム野幌の森）

「野幌の森」は道立自然公園（面積二〇五一ha）で、一八九九年分割払い下げに反対する農民の運動によって守られた。ここに農水省は農産物の輸送に支障があるとして幹線農道を計画した。一般交通の朝夕の混雑とは競合しない市場出荷を理由に行われる自然破壊道路を止めさせよう。（全国

集会後、十月十二日に札幌開発建設部は二〇〇二年度概算要求はしないと表明し、農道計画は中止となった。）

「木を燃やして森を蘇らせるードイツのユニークな自然公園プロジェクトー」

八巻一成（森林総合研究所北海道支所）

ドイツには原生的自然はほとんど無いと言われるが、国土の十五％は自然公園に指定され、美しい田園景観の保全と、観光・レクリエーション利用を計っている。ドイツ南西部に「自然公園の村プログラム」があって、地域内循環をすすめ、農業景観を守ろうとしている。農業から出るバイオマスのエネルギー化、風力・水力・太陽光利用の推進で、地域内エネルギーの循環が計られている。その一つに、自然公園内の森林資源を利用するプロジェクトがある。森を楽しんだ後に出てくる木を燃やすことによって、環境負荷を少しでも減らせる。天然二次林では薪炭材を採る事によって二段林となり、成長が促進し景観的にも好まれる。地域エネルギー政策と里山利用施策とが一致した例として、北海道でも参考になる。

第五分科会 森を生かすー一つの森が世界につながるー

：森と文化・文明、地球環境はいま、温暖化は植林で止まるか、環境法規、環境アセス、環境倫理、世界遺産…

「森を生かすー一つの森が世界につながるー」

畠山武道（北海道自然保護協会副会長）

世界的に見て森を失った文明の衰退は歴史的に明らかである。失ってから大切な事を知るのには、破滅へのシナリオだ。見えないもの、未来に起り

うる事をみんな考え、努力する事で、破壊を食い止めるのが環境時代の人類で、それが自然保護。自然環境は公共財であって、現在の市場メカニズムに関わらない。未来を担う子どもたち、未だ見ぬ子孫、途上国の人達、人間以外の生物にも環境権があって保障されなければならない。それを支えるのが環境倫理で、自然保護法制も多様な自然を丸ごと残せるように整備されなければならない。「長野冬季五輪と男子滑降スタート地点問題が残したもの」

富樫 均（長野県自然保護研究所）

長野県自然保護研究所は四年間かけて、冬季五輪と自然保護研究を紀要にまとめた。その中からスタート地点問題を報告する。

八方尾根は蛇紋岩が露出し、低温、多雪、乾燥条件と相俟って、多様で特異な生物種の分布と生態が見られる場所である。しかし、第一種特別地域が緩衝帯も無く、植生の連続性も無視されて公園指定が行われている。さらに、境界設定にかかわらずスキーゲレンデ利用や観光利用が行われている事が問題だ。

巨大化する五輪を分散開催させたが、会場を結ぶ道路網開発で大きな自然破壊が起きた。冬季五輪後、荒地地修復、リフト自主規制、天然記念物指定拡大など保護管理が進んだ面もある。東アジアモンsoon地帯にあり、最も南に位置する長野の特異な自然と、二〇世紀最後の祭典とが直面した問題として、これからも解析・議論を深めていきたい。

「CO₂排出権と森林」

前田 満（日本科学者会議北海道支部）

地球温暖化防止京都会議で、国益に反するとし

て条約批准を拒否するアメリカを引き止めようと、「排出権取り引き」条項を取り入れた。これにより、「偽りの熱帯植林」をしてCO₂削減を減らす理由としている。森林は成長してバイオマスを増やす過程では、CO₂を吸収固定するが、いずれ呼吸量と変わらなくなり、枯死したり伐採されればCO₂発生源になる。森林は一時的にCO₂を貯めているので、木を植える代わりに、CO₂排出を認めると言う理屈は成り立たない。温暖化防止は、人間活動からCO₂排出を少なくすることでなければならぬ。排出権ビジネスなど地球環境にとって害をもたらすだけだ。

「山林を暮らしに活かせるだろうか」

石田昭夫(余市町在住)

離農跡地を三五年前に買ったが、手を掛けられる事は限られており、植生の自然推移に任せる状況だが、そこから自然の営みや人の暮らしとの関係が分かってくる。手を掛ければそれなりに反応するし、自然に放置しておけばそれなりに興味ある植生遷移が観察できる。どちらにしろ人の暮らしに有益な反応を示してくれる。山とどのように付き合うか、それに見合った質素な暮らしを心がけたい。若い人たちが今の使い捨て生活を見直すきっかけとしてもらいたい。

「インカ帝国と大和に見るエネルギー循環の崩壊と、ブナ林はいかにして伐られたか」

北海道自然保護協会・北海道自然観察協議会

一〇〇年単位で考えると、ここ数十年でエネルギーの流れが急速に変わった。これをインカ帝国滅亡の過程と見比べてみる。大和民族の「母なる山の守り神」であるブナ林が乱伐された。エネルギー

ギーの流れが変わり、山も川も、熊も野鳥も困窮している。樹を植えてエネルギーを取り戻そう。「環境時代における環境の倫理」

渡辺 昂(日本科学者会議北海道支部)

物理学者である私にとっては重い課題だが、廃棄物問題と関わるなかで考えた事を整理する。「Japan as Number One」と言われた頃、同時に「economic animal」と言われた。儲かる物であれば何でも大量に造って売った。その行き着く先が「浪費不況」だ。これが深刻な「環境問題」の背景で、一人一人に環境倫理として問い掛けられている。

特別セッション

北方四島の自然保護「植物から見た国後島の自然」

佐藤 謙(北海学園大学)

国後島の植生は北海道と類似しているが、クリル諸島全体から見れば南の特異な植生だと言える。北海道の植生が開発で攪乱される前の状態が国後島で見られる貴重な所である。国有林であった事、ロシアは森林開発をしなかった事などから、人為の加わらない自然として世界的にも保護していかなければならない。最近、森林伐採計画や金鉱開発計画があって自然保護上問題になっている。日ロ両国で協力して守っていかねばならない。

※ 計 報

高橋延清さんはこの講演会後体調をくずし入院され、二〇〇二年一月三十日亡くなりました。協会の活動に最後迄大きく貢献されました。深くお悔み申し上げます。

アピール文(要旨)

見つめなおそう日本の森、地域と地球から

第十四回日本の森と自然を守る全国集会 in 北海道・アピール

一、温暖化対策は世界の急務です。温室効果ガスの排出削減を決めた京都議定書の批准の手続きを直ちに政府に取らせましよう。

二、自然の多様性と地域特性を無視した環境破壊の開発を直ちに止めさせるとともに、自然は子孫からの預かり物との考えを基本に、開発政策を自然生態系の保護と回復を基調としたものに転換させましよう。

三、山村地域における森林と林業、これらに関連する産業を甦らせるため、国有林野行政の民主的な改革を目指して、広範囲な国民的運動を展開させましよう。

二〇〇一年十月十四日

「第十四回日本の森と自然を守る全国集会 in 北海道」参加者一同